

石見銀山遺跡 ニュース

Newsletter of the Iwami-Ginzan Silver Mine Site

MAY 2004 NO.7

平成16年5月14日発行 第7号

島根県・大田市・温泉津町・仁摩町教育委員会



>> Contents

page	2	石見銀山遺跡国際シンポジウム開催 世界遺産登録推進室 足立克己
	4	石見銀山遺跡国際シンポジウム ～郷土の遺産から世界の遺産へ～を終えて 世界遺産登録推進室 中田行宏
	5	シンポジウム「金山・銀山の技術」参加記 石見銀山遺跡発掘調査事務所 尾村勝
	6	シンポジウム みんなで話そう石見銀山の開催 広域行政組合 今田善寿
	7	総合調査から (1) 発掘調査 中田健一 (2) 文献調査 原田洋一郎 (3) 街道調査 佐伯徳哉
	10	町並みを歩く⑥～修理の現場から(痕跡から分かること)～ 三谷岳史
	11	温泉津町温泉津伝統的建造物群保存地区 重要伝統的建造物群保存地区に選定! 温泉津町 重田聡
	12	鏝絵の魅力⑤ 渡部孝幸
	13~14	石見銀山遺跡調査活動日誌抄
	14	新任あいさつ 島根県教育庁参事 野村純一 島根県教育庁文化財課 世界遺産登録推進室長 和田謙一

【石見銀山国際シンポジウム講師らによる大久保間歩内視察】

石見銀山遺跡国際シンポジウム開催

世界遺産登録推進室 足立 克己

平成13年4月に世界遺産の暫定リストに登載された石見銀山遺跡は、平成15年10月22日に川村建夫文部科学大臣から平成19年の本登録という目標年次が示されました。島根県教育委員会では、多くの県民の方々に石見銀山遺跡のすばらしさを知っていただくための情報発信を続けていますが、去る平成16年3月21日（日）には、松江市にあるくびきメッセで、実際に世界遺産とはどのようなもので、世界遺産になったあとどのように保存活用していくのか、その取組方などについて考えるため、実際に世界遺産の登録業務に携わっている専門家を招いて、国際シンポジウムを開催しました。

パネラーは、ユネスコ世界遺産センターで暫定リストや推薦書の事務を行っているアレックス・バルサモ氏と、世界遺産の推薦書のすべてに目を通し、評価する立場にあるイコモス（世界記念物遺跡会議）アドバイザーのユッカ・ヨキレット博士、日本イコモス国内委員会理事で、イクロム（文化財保存修復研究国際センター）に出向してアジア



▲シンポジウム



▼田中 琢氏



稲葉 信子 氏

▲稲葉 信子氏



アレックス・バルサモ氏

▲アレックス・バルサモ氏



ユッカ・ヨキレット氏

▲ユッカ・ヨキレット氏



▲西村 幸夫氏

地区のプロジェクト構築を担当したこともある東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センターの稲葉信子博士の3名で、コーディネーターはイコモス副委員長の東京大学大学院西村幸夫博士にお願いしました。

また、シンポジウムに先立って、前日の3月20日にはパネラーの皆様は石見銀山遺跡の現地視察をしていただきました。石見銀山遺跡の中心である銀山柵内の釜屋間歩や大久保間歩坑内をはじめ、佐毘売山神社や龍源寺間歩、重要伝統的建造物群保存地区の大森銀山地区や、今度選定を受けることになった温泉津の町並み、港湾集落の沖泊地区などを視察したバルサモ氏とヨキレット氏は、銀山本体だけでなく、街道や港湾まで含んだ石見銀山遺跡のスケールの大きさと良好な保存状況に驚きを示すとともに、それらすべてをセットにした登録への取組を高く評価しました。

シンポジウム当日は、県内外から約380名の参加がありました。田中琢石見銀山遺跡調査整備委員会委員長の歓迎挨拶のあと、基調講演では、まずバルサモ氏から「世界遺産条約と推薦のプロセス」についての講演があり、世界遺産の定義や世界遺産の候補物件が世界遺産リストに登録されるまでの手続きと、それに必要な作業について説明がありました。続いて、ヨキレット博士からは、「世界遺産都市の保存」の例として、世界各地の鉱山都市のケースがスライドを交えて報告されました。文化遺産の登録基準として真正性が非常に重要であること、また、スロバキア共和国の鉱山都市バンスカ・シュティアヴニツァの例を挙げながら、都市の保存には利害の異なる地元関係者のコミュニケーションや協力が不可欠であることなどが紹介されました。稲葉博士からは「アジアの世界文化遺産・文化的景観」というテーマで、アジアの視点で見た世界文化遺産についてわかりやすく語っていただくとともに、先般タリバンによって破壊されたアフガニスタン・バーミヤーン遺跡群の復旧への日本の取組状況についても紹介していただきました。



▲佐毘売山神社視察



▲清水谷製錬所跡にて

パネルディスカッションでは西村博士のコーディネートにより、新たに登録を目指そうとしている世界遺産候補物件が持っている普遍的な価値が多様化し、それを証明することが困難になってきたこと、登録にはしっかりした保存管理計画（マネジメントプラン）が必要であることなど、登録に向けた現状や課題が浮き彫りにされました。

また、石見銀山遺跡の取組については、登録に向けたプロセスとしては非常によいスタートをきっているが、今後この遺跡の価値を一般の人にどのように説明していくか、あるいは来訪者が銀山について学習できるシステムの構築や、将来にわたって柔軟に対応できる保存管理計画の策定など、今後に向けて貴重な意見が次々と提案されました。

石見銀山遺跡国際シンポジウム ～郷土の遺産から世界の遺産へ～を終えて

世界遺産登録推進室 中田 行宏

平成16年3月21日に松江市「くにびきメッセ」で世界遺産に関する専門家を招いて石見銀山遺跡国際シンポジウムを開催しました。前日の現地視察とシンポジウムで私が感じたことを少しお話しします。



▲3/20 清水谷製錬所跡

3月20日に行われた石見銀山遺跡の現地視察（温泉津町、大田市大森町）では、海外からお招きした先生方から多彩な遺産が良好な形で残っていることを高く評価していただきましたが、一方では今後の遺跡の管理について地域全体で取り組む必要性を指摘されました。

視察中、大森の伝建地区の軒先や橋の欄干に竹の花筒が用意され、ヤブツバキが可憐に咲いていました。先生方への町民の歓迎の意を表しているかと伝えると先生方は大変喜んでおられました。遺跡を守るため地域全体で取り組む第一歩であると感じました。

3月21日の国際シンポジウムでは、石見銀山遺跡について海外の事例を挙げて登録への課題等について、基調講演とパネル・ディスカッションが行われました。石見銀山の価値は鉱山と街道・港湾等を含めた全体のシステムであり、今後のマネジメントプラン（保存管理計画）が重要であるとの提言がありました。

温泉津町並みの重伝建選定と銀山街道の国史跡追加指定等により線で結ばれて行く石見銀山遺跡を



▲3/20 軒先の花飾り（大森町）

どのように世界の人に見せ、保全していくのか。私達のこれからの課題であると思います。

今後、世界遺産登録後の姿を描くマネジメントプランを策定し、行政と住民と地元企業が協働して、遺跡の保全に努めることが私達に求められていると感じました。



▲3/20 大森町の町並み

シンポジウム 「金山・銀山の技術」参加記

石見銀山遺跡発掘調査事務所 尾村 勝

今回、山梨県で開催されたシンポジウムに参加し、県外の方々との意見交換など交流ができたことで鉱山遺跡が身近なものとして考えられるようになり、また石見銀山遺跡の重要性を再確認することができた機会となったと考えています。

シンポジウムの2日間は金山・銀山について集中した話題一色で有意義なものでした。井澤英二先生の報告では近世と現代との鉱山技術の違いについて話され、採掘や製錬方法の相違があるものの、機械化された大規模な現代鉱山と比較すると、人力中心の近世の鉱山技術には自ずと限界があると感じられました。萩原三雄先生と谷口一夫先生の報告では、地元山梨県の金山遺跡の鉱山技術のうち、採掘から



▲報告 村上隆氏

製錬まで使用された様々な道具類の解説は非常に興味深いものでした。また挽き臼という観点から、絵図を基に当時の鉱山技術の工程を推測していくのは一つの手段ではあるが、絶対的なものではなく、科学調査など多方面から考えていく必要性を特に感じた内容でした。滝川さんの事例報告では、佐渡金山遺跡の上相川の鉱山集落は二つの山の尾根の先端までという説明は、石見銀山遺跡の大森の集落にも似た立地という点で面白さを感じました。

発掘調査というものを狭い視野でしか考えられなかった自分でしたが、鉱山遺跡が科学調査や、鉱山技術という点などから他方に広がりを見せ、全国的

▶討論風景
(足立克己氏)



◀報告 遠藤浩巳氏

に重要な価値を持ってきているということが理解できました。又「生産遺跡」は技術という点で、その時代のテクノロジーの粋を集結した最先端の技術力がふんだんに盛り込まれているのにも驚かされました。

2日目の湯之奥金山博物館での見学では、実際に発掘調査で出土した金の粉成時の挽き臼の黒川型と湯之奥型の相違や、格子目に金粒を溜める「セリ板」、その金粒を水の入った木箱の「フネ」で採取する木製品などの、精錬前にあたる鉱石粉成後の汰り分け工程の金の採取道具を確認でき、報告の内容が直に伝わってくるものでした。また陶磁器や貨幣など生活用品の展示もあり、特に瀬戸焼の祖母懐の茶壺は初めて見ることができ、大きさと鉄釉の透明さは圧巻でした。ただ、瀬戸・美濃系と肥前系の陶磁器が最も多く確認されていることと、その時期に人口がピークに達し金山操業も16世紀前半だという説明は不十分であると感じられました。ほかに遺物展示の上部に図式入りの説明文が大きく設置され、すぐに理解できる点や、ジオラマ模型を使用し、鉱山作業の一日を再現するコーナーなどは楽しみながら見学出来ました。

あつという間の二日間でしたが、「人」と「もの」に大いに触れた二日間でした。このシンポジウムの主題の「ものづくり」の歴史とは、「人づくり」の歴史でもあるように思われました。

シンポジウム「みんなで話そう石見銀山」の開催

広域行政組合 今田 善寿



▲ロビーでのパネル展示

平成16年2月8日(日)世界遺産登録に向け、その機運を盛り上げるためのシンポジウム「みんなで話そう石見銀山」を大田市商工会議所3階ホールにおいてを開催し、遠くは山口県萩市や岡山県成羽町など圏域内外から約230人の参加者で会場は満席となりました。

シンポジウムは2部構成とし、第1部は、昨年度開催した「ここまで分かった石見銀山」の続編として6人の研究者らによる最新の調査報告を行い、午後からの第2部では、奈良文化財研究所主任研究官の村上隆氏をコメンテーターとして7人のパネリストによりディスカッションを行い、石見銀山遺跡について、会場の方々も併せて語り合いました。

◎第1部【ここまで分かった石見銀山】

【発掘調査】中田 健一氏 (大田市石見銀山課)

昭和58年より開催している発掘の概要のなかで、「採掘から精錬」という鉱山遺跡では全国的にもきわめて希な遺跡である。国内で初めて発見された銀精錬用の鉄鍋や数多くの鉄精錬技術の製品が見つまっていることを踏まえて、石見銀山の精錬技術は、わが国の金属精錬の歴史で培われた技術力を背景として成立し、支えていたことが想定される。

【文献調査】仲野 義文氏 (石見銀山資料館)

「文献の概要と成果」と題して、「銀山旧記」の史料批判も含めた歴史的事実に基づく正確な銀山の歴史の把握が必要である。また、灰吹法の伝播過程、銀山開発以降の日本銀の海外流出の様相、中国・ポルトガルなど、当時の銀貿易の実態解明が必要であると、他の鉱山との人的・技術的交流などを中国、朝鮮と石見銀山の歴史年表などの資料をとおし説明した。

【科学調査】村上 隆氏 (奈良文化財研究所主任研究官)

石見銀山の銀精錬の工程で出された「ユリカス」・「カラミ」などの分析を通し、銀の純度を高めていく工程を解説。また、石見銀山の価値について、16から18世紀にかけての近世遺構だけでなく、明治維新以後に西洋の最新技術が導入された後に築かれた近代遺構に至るまでの重層した遺構が眠っている壮大な一大生産・産業遺跡である。

【石造物調査】鳥谷 芳雄氏 (県文化財課世界遺産登録推進室)

平成15年度は大森地区の分布調査で、立正大学池上教授の指導のもと、地元関係者と同大学の考古学研究室の学生が参加し、大森地区全体で約5,000の墓石を確認。珍しいものとして、陶製の墓石や猫の塚などを確認した。



▲調査報告 (村上氏)

【街道・港湾調査】佐伯 徳哉氏 (県文化財課世界遺産登録推進室)

戦国時代(16世紀)に銀山から港への道と考えられる「鞆ヶ浦道」・「温泉津沖泊道」と温泉津と沖泊の往還を説明。

「鞆ヶ浦道」は、文献や古絵図からの解釈を省みて、仁

摩側に大内氏の直轄領があった時代に銀鉱石を運んだ路線と考えられ、「温泉津沖泊道」は毛利氏が石見地方を平定した頃の銀山と温泉津の港を結ぶ路線と現時点では考えている。

【旧熊谷家住宅保存修理】高橋 好夫氏 (文化財建造物保存技術協会)

平成13年から現在進行中の旧熊谷家に関する概要と保存修理工事をCG(コンピューターグラフィックス)の画像により、分かりやすく解説。寛政12年の大火で焼失したことが文献では分かっていたが、発掘作業によってそれらが実証された。また、大正10年頃の写真によって当時の屋根などの様子が分かり、復元する際の大きな材料となった。

◎第2部【みんなで話そう石見銀山】

第2部は午後1時30分から広域行政組合管理者熊谷市長の挨拶から幕を開きました。奈良文化財研究所主任調査官の村上隆氏をコメンテーターとして迎え、住民代表として高橋美也子氏・仲野義文氏・多田房明氏・田中裕子氏・恒松勝氏、行政側代表として足立克己氏・遠藤浩巳氏のパネリストによる質問応答形式でのパネルディスカッションに加え、会場からの質問に答えるという形で進んで行きました。

住民の疑問の声として「石見銀山のことはあまり知らない・見栄えのしない銀山のどこに世界遺産の価値があるのか」「もうこのままでいい。あまりかまわないでほしい」など、率直なご意見や「世界遺産として石見銀山が世間に出たときの“青写真”が分からない。行政だけでなく住民とともに作り上げる努力が必要ではないか」「自分の家が世界遺産になったらどうなるのか?戸惑ってしまう」「石見銀山を考える市民の日をつくり、一体となった行動を」「遺跡や景観を保全する責任、義務を果たしてゆきたい」など3時間にわたり様々な疑問、質問、意見が飛び交っていました。



▲シンポジウム風景

間、深く印象に残ったものに、大森町で伝建地区内にお住まいの方より、「新しい様式の家も古い形の家もそれぞれ良さがある。しかし、30年大森で住んでみてやっとその良さがわかった。子どもや孫の代までのことを考えてもよかったと思っている。」と語っていただきました。

終わりに村上氏より、「日本で初めての“産業遺産”を登録しようとしている。石見銀山は面的なもの、重層的な広がある遺跡である。日本的な“観光客”だけ来るのではなく、発掘、調査成果を集約し、世界中の研究者がここに来れば最新の鉱山や銀の情報が入るところであってほしい。また、遺跡や精錬技術、景観など、他の地域では既に失われた中世からのものが奇跡的に残っているところである。保全や活用、新しい観光の方向性を行政だけでなく住民も主体的に取り組んでほしい」と、まとめていただきました。

総合調査から

(1)発掘調査 大田市 中田 健一

平成15年度は、宮ノ前、本谷、下河原、出土谷地区で調査を行いました。

本谷地区は「銀山柵内」でも採掘の痕跡を良く留めている地区で、本格的な発掘調査は、初めての実施となりました。調査場所は、本谷中腹の本間歩と釜屋歩付近です。

調査の結果、本間歩付近では、16世紀末～17世紀前半の遺構面が9面、確認されました。これは谷を埋め立てながら、何度も建物や作業面として使われていたことを示し、銀山最盛期に、この場所で銀生産の諸活動が行われていたことを証明するものです。と同時に、石銀地区と同じように遺存状態が良好な地区と判明しました。また、トレンチの東西に広がる露頭掘はトレンチの下層よりも相対的に古くなることが明らかとなりました。

釜屋間歩付近では、トレンチ(試掘坑)を2箇所を設定し、掘り下げるとともに、周辺の伐採と清掃を行い、岩盤を掘り込んだ高さ18mの石段とそれに伴う3段に加工された遺構が発見されました。性格や用途など不明の点が多く、「謎の岩盤加工遺構」とは いわれますが、銀山の往時の景観が姿を現しました。

トレンチでは17世紀前半からの遺構面が確認され、金属の塊も出土しました。科学的な分析調査の結果、金属塊は「貴鉛」と断定されました。

「貴鉛」とは、「灰吹き」される前の鉛銀合金で、国内の遺跡では初めての出土でした。これまでに発見された「灰吹銀」や「灰吹鍋」などとあわせて、石見銀山の技術を示す物的証拠として注目されています。

宮ノ前地区では、かつて県道の調査で製錬工房が確認されたことにより、その周辺の状況を調査しました。17世紀初めの建物跡の一部や石垣を検出し、遺跡の広が



▲釜屋間歩付近岩盤加工遺構

りが確認されました。「町立て」といわれる江戸時代初めの町づくりとの関連が注目されています。

下河原地区では、伝建地区内の下層の様子を調査。表土から1.3mの厚さで江戸時代初め頃の「ズリ」が敷き詰められていた様子を確認。建物跡も検出されました。

出土谷地区では、18世紀後半の製錬所付近を調査し、一段高いところに明治期の遺物が集中して見つかりました。



▲宮ノ前第2トレンチ

◀「貴鉛」が出土したトレンチ



その遺物の一つに、「大森鉱山所」と銘の読める陶器が出土。明治20(1887)年に設置された「大森鉱山所」の施設が出土谷に設けられたことが知られており、裏付ける資料となりました。ちなみに翌、明治21(1888)年には「大森鉱山事務所」と改められており、1年限りの名称です。残されている大森鉱山の施設に関する図面類との対比から、より具体的な石見銀山遺跡の近代化の様子を知ることができると期待されています。

(2) 文献調査 原田洋一郎

銀山方役所の記録を抜粋した「萬留書抜」（大田市大森 野沢家文書）によれば、天保14(1843)年、稼方に格別の出精があったとして、銀山方役所より賞された者たちの中に、山師の佐伯常太・川島茂太とともに本谷新口間歩を稼ぎ、灰吹銀631匁あまりを産出した西田村の種蔵の名が記されています。銀山の稼行に、銀山町の山師以外の者が関わっていたことは興味深いことです。



▲天保15年(1844年)「勘定帳」表紙

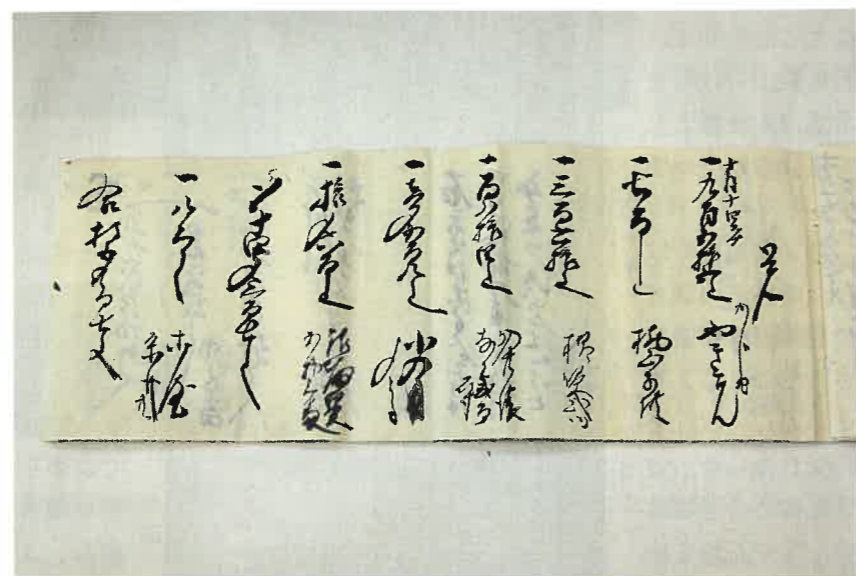
今年度の文献調査において、種蔵の後裔、渡利家（温泉津町湯里大字西田）の古文書を調べた際に、「天保十五年辰十月吉日 勘定帳」他3冊の帳面をみることができました。これらは、天保15(1844)年9月から11月の足かけ3ヶ月の間、渡利家が関わった清水谷の端山の取明け稼ぎ稼行に関する経費を書き上げたものです。帳面からは、実際の経営は銀山町の山師、水田甚七が行い、渡利家は必要経費の出資を担っていたことがわかります。おそらく、前年の本谷新口間歩でも同様の分担がなされていたことと思われます。

実質的に稼行が行われたのは40日ほどで、この間の経費として銭43貫

文あまりが用いられています。これは、御直山の40日分の経費と比べれば半分ほどではありましたが、この稼行によって得られた鍔（鉱石）の売り上げはわずかに銭6貫497文に過ぎませんでした。銀山方役所からの手当、1貫587文を加えても、とても出資の割に合う事業であったとはいえなかったことがわかります。

渡利家は屋号を「殿居（どい）」といい、種蔵の頃には西田村の年寄りを勤めていました。他の関係史料から、当時、同家がかかなりの経済力を有していたことも明らかです。そのような有力者が、採算の合わない銀山稼行に、どのような理由から関わったのでしょうか。これまで私たちは、銀山料の村々の銀山への寄与は、代官所によって定められた政策にただ従っただけであるように捉えてきましたが、実は銀山稼ぎの存続が、周辺地域の人々にとっても何らかの事情から必要とされていたのではないのでしょうか。銀山料の諸村についても、さまざまな側面から光をあててみる必要があります。

石見銀山に関しては、16世紀～17世紀初めにかけての繁栄期に人々の目が集まりますが、銀山稼ぎと銀山町が長きにわたって維持されたことも、注目に値することです。その背景を明らかにするために、衰退後の銀山稼ぎの具体的なあり方に加えて、銀山と地域の関係のあり方を周辺地域の視点から検討することが、ぜひとも求められます。まだまだ調査の課題は多く残されているのです。



▲稼業に関する経費の記載

(3) 街道調査

……平成14・15年度の成果と今年度の調査
佐伯 徳哉

平成14・15年度と2年間にわたって調査した温泉津沖泊道と鞆ヶ浦道のルート確定を主目的とした調査に区切りをつけることができました。厳冬の山中において直接ご案内いただいた皆様をはじめ、ご協力いただきました多くの皆様に心より感謝申し上げます。



▲鞆ヶ浦道 馬路付近土橋

鞆ヶ浦道は、1526年、博多商人で日明貿易とも関係した神屋寿禎が、銅の商いのため出雲鷺浦を目指して石見沖の海上を航行していた時、観音の靈光を見て石見銀山を「発見」して本格的に開発を加えて以降、16世紀半ばまで銀鉱石・銀搬出のため用いた幹線道です。ちょうどこの時期は、石見国が、周防山口に本拠を置いて中国地方西部から北九州を支配した西日本最大の戦国大名大内氏の領国のひとつであった時代にあたります。

この道は、銀山畑口・吉迫口から柑子谷・上野・西谷を経て現在の友に至る道で、16世紀前半当時、大内氏が直接支配をしていた大内・天河内側を通ります。大内氏が日明貿易の拠点都市としていた博多を中心に活動した神屋寿禎らとしては、石見在来の領主らが割拠していた温泉郷側は避けて大内氏の

保護で安全に運搬ができる大内側のルートを選んだものと考えられます。実際、沿線上には、銀鉱石の輸送にまつわる伝承なども残っています。

しかし、16世紀半ばに大内氏が衰退滅亡した後、この道は、銀搬出の幹線道としては温泉津沖泊道にその地位を譲ります。

温泉津沖泊道は、16世紀半ば、大内氏に代わって、安芸国吉田に本拠を置いた戦国大名毛利氏が政治的に混乱する石見を平定・支配して以降用いられた。

いわゆる銀山坂根口から降路坂・西田・清水を経て現在の温泉津および沖泊へとつながる地元でもよく知られた道です。1600年の関ヶ原の戦後までの約半世紀にわたって供用された幹線道ですが、この戦い以後、石見銀山付近が江戸幕府の直轄支配をうけるようになると、銀搬出は尾道方面へと移動していきます。しかし、温泉津沖泊道は、温泉津の町と港の繁栄を引き継ぎ、江戸時代を通じて、銀山へ米・麦などをはじめ主要物資の輸送をつかさどって、引き続き幹線道として用いられました。

そこで今年度は、昨年度までの成果を下地に、銀山を出発点とすれば街道

の終着点である鞆ヶ浦と沖泊の港湾集落の歴史的役割や景観に関する調査を実施していきたいと考えています。つきましては、地元の皆様をはじめ、多くの皆様方の、引き続き変わらぬご協力をお願いいたします。



▲道床山と清水集落方面（温泉津沖泊道、松山～清水道中）

町並みを歩く 6 ～修理の現場から(痕跡から分かること)～

町並みを構成している建物は、生活スタイルの変化や使い勝手の面から、何らかの改造を受けて今日に至っています。

建物の修理を行なう際は建築当初、あるいは改造前の姿への復原を目指しますが、それには具体的な手がかりが必要となるため、修理に先立って建物に

残された痕跡の調査を行います。

その調査に基づいて修理が始まりますが、表面からは見えなかった痕跡などが修理中に新たに見つかります。それに伴い当初の修理計画の変更をすることもしばしばです。



〈修理前〉



〈修理後〉

栄泉寺本堂

大森町駒の足、町筋西側の山手にある曹洞宗の寺院。平成15年度に修理を行なった本堂も、痕跡に基づきかつての姿に復原した建物のひとつ。由緒によれば寺院としての開基は慶長元年(1596)とされている。現在の本堂は、宝永2年(1705)建立の建物が寛政の大火で焼失した後、文化4年(1807)に再建されたことが由緒や棟札から分かる。享保の飢饉の時に、後に薩摩芋を持ち帰ることになる修行僧の泰永と、代官井戸平左衛門が出会ったのはこの場所だといわれている。本堂は周囲より1段高台にあるため、町並みを歩くとその威容をいたるところから望見できる。

栄泉寺本堂は修理前に「屋根には向拝がないのに外階段があるのは不自然」という指摘を受けていたが、正面出入り口付近の床下を調査した結果、畳の下から内部に階段があった時の框がそのまま見つかり、また敷居土台にも床板や根太が取り付けられた痕跡が残されていた。

曹洞宗寺院のなかには、本堂内部に土間や階段を設ける場合があり、栄泉寺本堂も痕跡から建立当初

はこの形式だったことが分かった。

ある時期に床面積を増やすため、内部の階段部分に床を張って畳を敷き、階段や回廊を外に出したようです。

今回の修理においては、当初外階段と回廊をそのまま使用する計画だったが、見つかった部材や痕跡により建物内の階段の一部を復原することとしました。

(大田市石見銀山課 三谷岳史)



痕跡調査から、座板の撤去されている範囲に階段が収まっていたことが分かった。畳の下にはかつての上がり框が床材としてそのまま使われており、ガラス戸真下の土台には階段の取り付けにいたった痕跡が残されていた。



痕跡に基づき建物内に階段を復原し、外階段と回廊を撤去した。

温泉津町温泉津伝統的建造物群保存地区 重要伝統的建造物群保存地区に選定!

温泉津町 重田 聡



▲龍御前神社旧本殿から温泉津港方向を見下ろす



湯町の温泉街▶

温泉津町は、平成16年2月9日「温泉津伝統的建造物群保存地区」(伝建地区)を指定し、同日付で文部科学大臣に「重要伝統的建造物群保存地区」(重伝建地区)の選定申出を行いました。そして同年4月16日、国の文化審議会から答申がなされ、正式には官報告示を待って重伝建地区として選定される運びとなりました。選定基準は「伝統的建造物群及び地割がよく旧態を保持しているもの」で、保存地区の分類は「港町・温泉町」です。重伝建地区は、平成16年3月末現在、全国に62地区ありますが、同時に答申がなされた高山市下二之町大新町に次いで64番目の重伝建地区となり、温泉町としては全国初となります。また、鳥根県内の重伝建地区としては、昭和62年に選定された「大田市大森銀山」に次いで2番目となります。

平成9年度から伝統的建造物群保存対策調査を実施し、以来様々な出来事がありましたが、7年の歳月をかけて、国にこの保存地区の価値が高いことを認めてもらえるに至り、これまでの関係者の方々のご理解とご協力に改めて感謝すると共に、改めてお礼を申し上げたいと思います。

さて、温泉津の重伝建地区は、その名が示すとおり中世から温泉と港で栄えた歴史があり、石見銀山

の開発とともにその外港として位置付けられ、発展してきた町並みです。狭い谷筋に沿ってつくられた約800メートルの主道を挟んで南北の歴史的景観を含めた範囲を保存地区に決定し、面積は約33.7haです。保存地区の町並みは、近世の町割をよく残し、江戸時代末期から昭和初期までに建てられた切妻造・平入の町家を中心として、西側には廻船問屋の屋敷、東側には2・3階建の温泉旅館、大きな敷地を有する社寺や洋風建築などの多様な伝統的建造物を残しているとともに、特色ある歴史的風致を形成しています。また、屋根には棧瓦葺の石州瓦を使用しているところが多く、愛宕神社や龍御前神社などの高い場所からの景観も特徴的です。

昭和29年に湯里村、福波村、井田村と温泉津町が合併して新たな町制を敷きましたが、人口の流出は止まらず、近代化の波にこの保存地区もこれまでいくつもの伝統的な建造物が取り壊されたり建替えられたりしてきました。しかし重伝建選定を契機に、長い年月をかけて何代にもわたって受け継がれてきた貴重な文化的遺産を後世に伝えていく大きな責務を持っていることをそれぞれが自覚し、新たなまちづくりに向かって進んでいくことが必要です。

〔 鏝絵の魅力⑤ 〕

渡部 孝幸

石見に残る鏝絵は技巧的なものが数多く残されています。しかし、中には力を抜いたユーモアのある作品もあり、絵柄の種類が多いのも特徴にあげられると思います。

今回紹介するのは、極めてシンプルに描かれています。なぜか疲れを癒してくれる鏝絵です。

昨年6月、JR山陰線大田市駅前の駐輪場に見事なセメントアートを作った左官の品川博さんらが見つけたものです。

駐輪場のセメントアートは、左官である兄の清志さんと息子の福太郎さんの3人で、5月の連休明けから1ヶ月間、故郷の瑞穂町から通い続け造り上げました。

瑞穂町から大田までは約1時間の道のり。この通いの道中で偶然見つけたのがこの「笑顔」、スマイルマークです。

品川さんらは、この鏝絵のなんともいえない笑顔を仕事の行き帰りに必ず見ること随分と癒されたそうです。



▲笑顔父

スマイルマークは、左官で世帯主の木村友治さん(65)が、平成6年ごろ古くなってぼろぼろに傷んでいた土蔵を塗りなおしたとき、平たい丸しかなかったところに出来心で描いたものだといいます。妻壁の両面に施されており、お父さんとお母さんらしい満面の笑みがなんともほほえましいです。

友治さんは神戸で左官業を営んでいます。妻の悦子さんも一緒に働いていましたが、今では農作業しながら家を守っています。

友治さんの物好きは、実はこれだけではなく、主屋の壁のそこかしこに、幾何学模様の漆喰や木彫が施されているのです。また、主屋は茅葺きでしっかりした骨組みらしく町から文化財にしませんかと言



▲笑顔母

われ壊すを止めて鉄板で覆ったとか。そばの畑に立つ案山子はこれまたすさまじい作品で、歯を剥き出した猿なのです。まさに、猿除けに作られたものだと思います。立てっぱなしでは効き目がないので、出したり仕舞ったり時期を選ぶそうです。

このことを以前月刊雑誌「左官教室」に載せたところ、品川博さんから「師匠でもある長兄が、『友治さんは旧姓を中村といい、同じ瑞穂町出身で私の師匠だよ』というので驚いた」と教えられ、不思議な縁を感じました。

瑞穂町には、品川さんの作品があります。一つは、葬祭場「紫光苑」の正面ポーチ屋根の入母屋の三角の壁に直接施された「鶴と牡丹」。二つ目は、明覚寺の本堂左手の内陣の三面の小壁に取り付けられた7作品です。

東面の「天女」と「蓮池」が平成8年に製作され、南面の角の「龍」と西面の四つに仕切られた壁面をうまく使って造られた「天界と人界との交流図」は平成11年に製作されたものです。

このとき品川さんのセメントアートと初めて出会い、そのセメントの可能性に驚いたことが、やがて大田市が用意したトイレや駐輪場などにセメントアートが出現するきっかけになりました。



▲天女

石見銀山遺跡調査活動日誌抄

下半期・平成15年10月～平成16年3月

10/9	県市)田中義昭氏発掘調査現地指導会(於:大森)	12/1	県市町)鳥取環境大学浅川滋男氏沖泊・鞆ヶ浦集落現地指導
10/10	県)島根大学附属図書館古文書調査(街道調査)	12/3	県)街道調査報告書作成検討会議(於:県立博物館)
10/14	県)馬路山崎家文書調査(街道調査)	12/6~7	温泉津)文化庁建造物課江面主任温泉津伝建現地指導
10/21	河村文科相、澄田県知事に「H19世界文化遺産登録を目指しH17推薦書作成に向けて協力する」と表明	12/6	温泉津)温泉津伝建住民説明会(於:温泉津公民館)
10/22	県市町)街道調査検討会(於:県博)	12/7~8	日本伝統建築技術保存会来森・細見啓三氏記念講演(於:交流センター)
10/25	広域)2003銀の道ウォーク(矢滝城跡~祖式集落、230名参加)	12/8~9	佐渡川上家文書調査(文献調査)
10/26	市)旧熊谷家保存修理工事現場公開(見学者500人)	12/8~10	県市)科学調査部会(於:大森町)
10/27	県市町)文化庁記念物課協議(於:文化庁)	12/9	山口県文書館調査(街道調査)
10/28	市町)第4回石見銀山遺跡保存管理計画策定委員会(於:大田市)	12/9~10	県市町)文化庁記念物課坂井主任現地指導(於:沖泊・鞆ヶ浦・宮ノ前・本谷)
10/28~29	市町)文化庁記念物課磯村主任調査官現地指導(於:温泉津・仁摩)	12/9~18	温泉津)町並み保存説明会
10/30~31	万屋文書調査(於:温泉津、文献調査団)	12/18~19	市)小泉和子氏熊谷家家財調査現地指導(於:大森町)
10/31	渡利家文書調査(於:温泉津、文献調査団)	1/5	温泉津)都市計画(原案)説明会
11/6	県市町)石見銀山遺跡調査整備委員現地視察	1/8~23	温泉津)都市計画公告・縦覧
11/6~7	県市町)石見銀山遺跡調査整備委員会(於:あすてらす)	1/9	県市町)第12回県市町合同会議(於:大田市)
11/10	県市町)第4回世界遺産合同ヒアリング(於:文化庁)	1/12	県市)サイン整備地元協議(於:交流センター)
11/13	市)北垣聡一郎氏石垣現地指導(於:大森)	1/19	県市町)第5回文化庁世界遺産ヒアリング(於:文化庁)
11/14	県市町)第11回県市町合同連絡会(於:県教委)	1/20	文化庁建造物課江面主任温泉津伝建協議(於:文化庁)
11/21	市)文化庁建造物課田村技官熊谷家現地指導	1/26	文化財防火デー(PM大森)
11/24	NPO)石見銀山ツーリズムネットワークin大森(140名参加)	1/30	温泉津)町都市計画審議会
11/30	市)遺跡現地説明会(貴鉛公開・本谷・下河原、「ボランティアガイドの会」含む)	2/3	温泉津)町並み保存審議会
11/30	市)大森町民説明会(於:交流センター)	2/8	広域)「みんなで話そう石見銀山」(於:大田商工会議所、230名参加)
		2/9	県市)科学調査部会(於:大森)温泉津伝建地区指定
		2/17~18	重要伝統的建造物群保存地区選定申出文化庁建造物課梅津技官温泉津・大森現地指導
		2/28	世界遺産をめざす会)銀山栃畑谷の竹伐採(50名参加)

石見銀山遺跡調査活動日誌抄

下半期・平成15年10月～平成16年3月

2/28～3/1	県市)科学調査研究会シンポ「金山・銀山の技術」参加(於:山梨県石和町)	3/23	市)細見啓三氏大森伝建現地指導
3/2	県市町)第13回県市町合同連絡会(於:大田市)	3/23	県市町)第1回推薦書作成専門委員会(於:東京)
3/7	銀山「梅まつり」	3/27～28	国文化財分科会専門委温泉津伝建現地視察
3/21	県)石見銀山遺跡国際シンポジウム「世界遺産と石見銀山～郷土の遺産から世界の遺産へ」(於:くにびきメッセ、400名参加)	3/29～30	県市町)平澤麻衣子氏沖泊・柄ヶ浦集落現地指導
3/23	市)伝建審議会(於:交流センター)	3/30	市町)第5回史跡保存管理計画策定委員会(於:大田市)

新任あいさつ

島根県教育庁参事 野村 純一

4月1日付け人事異動により、島根県教育庁に新設された参事の職を拝命し、いよいよ山場を迎える石見銀山の世界遺産登録を目指す一大プロジェクト事業に加わることとなりました。

世界遺産への登録は平成19年を目標に進めていますが、このためには調査研究は勿論、必要とされる要件を整えた上で、来年7月には県から文化庁へ「世界遺産登録推薦書」を提出する必要があります。まだまだクリアすべき多くの問題・課題を抱え楽観は許されない状況であり、地元の皆様や大田市、仁摩町、温泉津町とも連携・協力し、是非とも所期の目的を達成しなければと気を引き締めております。

現在、国も地方も厳しい経済情勢や財政難を背景に、明るい話題の少ない中で、世界遺産登録の実現は、県民の皆様にとって、郷土への誇りと愛着をもち、活力に満ちた地域づくりを進める上で、大きな希望と自信を与えてくれるものと期待しています。地元地域をはじめ、県内外の皆様方のご理解とご支援をお願い致しまして、新任の挨拶とさせていただきます。



島根県教育庁 世界遺産登録推進室長 和田 謙一

この4月から世界遺産登録推進室に参りました和田謙一と申します。前任は、環境政策課で環境行政に携わっておりました。石見銀山に関しては一人の県民としての知識しかない状態で、一日も早く、関係の皆様に一員として迎えていただけるようがんばります。

さて、石見銀山遺跡を世界遺産として登録しようという取り組みもいよいよ佳境に入ってきました。行政だけの取り組みから、地域の方々をはじめ多くの皆様の共通関心事になってきました。多くの事柄が形を成し、関係の方々それぞれに具体的な姿がみえてきたとき、また、新たな課題が生じて参りましょう。

「百里の道は九十九里をもって半ばとする」という言葉があります。一つひとつの事柄に丁寧に対応しながら、世界有数の銀鉱山遺跡である石見銀山を人類共通のかけがえのない文化遺産とするため微力を尽くしたいと思っています。

石見銀山を愛する皆様の変わらぬ御指導御鞭撻をお願いいたします。

